

ローマ人への手紙第六回質問

3..23 すべての人は罪を犯して、神の栄光を受けることができず、
3..24 神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いあがなを通して、価なしに
義と認められるからです。

3..25 神はこの方を、信仰によって受けるべき、血による宥めなだのささげ物
として公に示されました。「自分の義を明らかにされるためです。神
は忍耐をもって、これまで犯されてきた罪を見逃して「られたのです。
3..26 すなわち、「自分が義であり、イエスを信じる者を義と認める方であ
ることを示すため、今この時に、「自分の義を明らかにされたのです。

(ロマ三章二三―二六節／新改訳2017)

(問一) 24、25節では義と認められることをどのように説明していますか。

(問二) 義と認められることは、どのようにして達成されますか。

【注】「義と認める」とは、正しい者とみなす、正しい者と申し渡すこと
です。「贖い」とは、身代金を支払うことによって得られる解放、また
は、救い出されることを意味しています。「宥めなだの供え物」「罪の贖いあがな」
とは、怒っている神を罪のある人間がなだめることではありません。
罪ある人間に対する神の律法の要求が、神「自身の御子の死によって、
完全に満たされることです。

(問三) 神に義と認められるために、信仰はどんな重要な役目を果たしますか。

(問四) 信仰の対象はなんですか。または、だれですか。



キリストの贖いあがなによる救い

(ロマ三章二三―二四節)

救いについて教える宗教は、キリスト教以外にもいくらかあります。しかし、実は、その救いの内容が問題で、救いが贖いに結びつけられている宗教は、キリスト教だけしかありません。そこで、この贖いということとは、キリスト教の中心メッセージであると言っていていいわけですし、この贖いについてよく理解することがキリスト教の中心である福音を理解する上で重要だと思えます。そこで、きょうはこの点について学びたいと思えます。きょう学ぼうとしてしているこの個所は、非常に重要なことを教えています。キリスト教の中心メッセージであると今申しましたが、罪と救いについて、これほどはつきり教えている個所は、ほかにないくらいです。もちろん、聖書の中には、これと全く同じことを教えている個所はありますが、これくらいはつきりと教えている個所は、ほかにないでしょう。

ここでは、まず、なぜイエス・キリストを信じることによって救われるのかという理由が述べられています。つまり、二二―二三節の説明です。二二―二三節では、人間が律法を守ることによって、神の義を全うすることはできなくなってしまうので、イエス・キリストを信じることによって神の義が全うされるように、神はしてくださったのだと教えています。そして、神の義が全うされるとは、わたしたちが救われるということだとも申しました。そして、その理由が二三節にあるわけです。「というのは、すべての人は罪を犯したので、神の栄光を失ってしまっており」です。この文章は、

明瞭であって、その意味は明らかです。「罪を犯した⁽¹⁾」ということばは、原語では不定過去形が使われていますから、わたしたちが犯した個々の罪のことではなく、ただ一回の罪、つまりアダムによる墮罪を意味しています。わたしたち人類は、アダムが罪に陥って以来、「神の栄光を失って⁽²⁾」しまったのです。

人間は、神の栄光のために、⁽³⁾神のかたちに似た者として造られました。⁽⁴⁾ところが、人類の祖アダムが罪を犯したとき、全人類は、アダムとともに罪を犯し、神の栄光を失い、人間の顔には、明らかに罪ゆえの苦悩が表われてきたのです。生まれただけの赤ん坊が、清浄無垢のように見えながら、成長していくに従って、純真さを失い、罪のために汚れ、人をあざむき、陥れ、ねたみと憎しみで、顔には苦悩がありありと出て来るのは、生まれたばかりの赤ん坊には罪がないからなのではありません。罪を持って生まれて来ていますし、神の栄光を失った存在としてこの世に出て来ているのですが、まだそれほどはつきりとは表われていないだけなのです。この世の中を生きていくとき、どこから汚れに染まってしまったのではなく、本来、うちに持っている罪が発芽し、それが人生を汚濁と腐敗によって、色濃く染め上げていくにすぎません。神の栄光を失った人間のたどらざるをえない運命に相違ありません。

どんなに修養を積み、難行苦行し、努力をかさねたところで、失ってしまった神の栄光を、人間の手で取り戻すことはできませんし、ひとたび犯された神の義を、人間の手で回復

することなどできるわけがありません。ここで、もしその回復が可能であるとすれば、それは神の御手による以外にはないのです。

ところで、神は被害者であられ、加害者を救済しなければならぬ立場にはおられませんし、救済しなければならぬ理由は全くありません。加害者が被害者に対して、つぐないをし、被害者を救済するというのなら話はわかります。ですから、たとい神以外に、失われた神の義を回復することのできる人がいないとしても、神がそれをするなど、到底考えられることではありません。けれども、神はそれをしてくださいました。ですから、「彼らは神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いによって、賜物として義とされるのである」と言われているとおりです。

わたしたち人間は、自らの意志で罪を犯し、神から与えられた創造の冠としての栄光を失ってしまった者たちです。そのような者たちを、神は決して見捨ててしまわれませんでした。価値のあるものを愛するときには、それほど犠牲を払う必要はないでしょう。しかし、わたしたち人間は、もはや価値ある存在でなくなってしまうのに、神は、大きな犠牲を払って、わたしたちのために救いを用意し、それを提供してくださいました。それが、ここで言われている事柄です。「神の恵みにより……賜物として義とされるのである」ということは、無条件で救われるということですが、この無条件の救いがわたしたちに提供されるについては、神の側で絶大な犠牲が払われたことを覚えなければなりません。それは、

御子「キリスト・イエスによる贖い」です。

そこで、「贖い」⁽⁵⁾について考えてみなければなりません。このことばの背景を知るために、わたしたちは旧約聖書を見る必要があります。この「贖い」ということばが意味する思想的背景は、旧約聖書の中に出て来るからです。たとえば、出エジプト記二一章二八―三〇節を見ると、ある人が飼っていた雄牛が角でほかの人を殺したとき、その飼い主は、ある額のお金を、そのために支払わなければなりませんでした。そうしないなら、その飼い主のちは奪われました。また、レビ記二五章四七―五一節を見ると、イスラエルの人が貧しいがために、金持ちの人に身売りをしたとき、親戚の者がお金を払って、その人を買戻すことができました。またイザヤ書四五章一三節では、戦争のときの捕虜を解放するときに代金を支払うことが言及されています。これらの出来事に出て来る支払うべき代金⁽⁶⁾のことを、七十人訳のギリシャ語聖書では、リュトロンと訳していて、これが、ここで使われている「贖い」の原語であるアポリュトロシスと同じ動詞から出ていることばです。このリュトロンというのは、旧約聖書以外でも、ほぼ同じような意味で使われており、質や抵当に入っている物を請け出すために支払われる代金であるとか、奴隷を解放するために支払われる代金を指しておりました。

このリュトロンということばは、新約聖書では、二箇所に使われています。一つは、マタイによる福音書二〇章二八節で、「人の子が来たのも、仕えられるためではなく、仕えるためであり、多くの人々のあがないとして、自分のいのちを

与えるためである」という個所で、もう一つは、これと並行している個所で、マルコによる福音書一〇章四五節です。

このリュトロンということばは、また動詞でも使われています。旧約聖書の七十人訳のギリシヤ語聖書では、神がイスラエルの民を、エジプトの奴隷状態から救い出されるとき、おもに使われています。

こうした主として旧約聖書の用法、および、旧約聖書の思想を背景にして、このパウロのことばの使い方を考えてみることができると思います。新約聖書の中では、この「贖い」に関連し、同じ思想を表わすものとして、次のようなみことばがあります。

「あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを知らないのですか。あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。」

「あなたがたは、代価をもって買われたのです。人間の奴隷となつてはいけません。」

「キリストは、わたしたちのために、のろいとなつて、律法ののろいからわたしたちを贖い出してください。」

「それは、律法の下にある者たちを贖い出すためであり……。」

「この自由を与えてくださるために、キリストはわたしたちを解放してください。」

「兄弟たち、あなたがたは自由を得るために召されたのであり……。」

「ご承知のように、あなたがたが先祖から伝わったむなし

い生き方から贖い出されたのは、銀や金のような朽ちる物にはよらず、傷もなく汚れもない小羊のようなキリストの、尊い血によったのです。⁽¹³⁾」

「しかしキリストは、すでに成就したすばらしい事がらの大祭司として来られ、手で造った物でない、言い替えば、この造られた物とは違った、さらに偉大な、さらに完全な幕屋を通り、また、やぎと小牛との血によってではなく、ご自分の血によって、ただ一度、まことの至聖所⁽¹⁴⁾にはいり、永遠の贖いを成し遂げられたのです。」

これらは、すべてがパウロの手紙にあるのではなく、新約聖書全体にわたるものですが、それだけに、新約聖書の「贖い」に関する考え方を知ることができると思います。新約聖書が教えていることは、イエス・キリストがわたしたち罪人のために、贖いを成し遂げてくださったということとです。こともあるうに、神の御子は、ご自分のいのちをその代価として支払われることによって、その大きな犠牲によって、わたしたちを罪から救い出してくださいました。

ある人々は、聖書がこのようにはつきり教えているのに、キリストの身代わりの贖いを否定します。キリストは代価を支払ったのではなく、犠牲を払ったにすぎないのだと申します。もし代価を支払ったと言うのなら、いったいだれに対して支払ったのかと言います。そして、まさか悪魔に対して支払ったわけではあるまいと言って、この思想に反対します。しかし、だれに対して代価を支払ったかが問題なのではありません。わたしたちが罪の奴隷から解放され、自由になるた

めには、だれかが、わたしたちのために、代価を払ってくださることが必要でした。それを支払うことのできる資格は、神しかおられず、しかも、神は被害者であって、支払う責任など毛頭ありません。それなのに、あえて神はわたしたちを愛するがゆえに、ご自分の尊いのちを代価として支払うことによつて、わたしたちを罪から救い出してくださいだったのです。ですから、この神の恵みによる救いがわかるとき、わたしたちはこれをどんなに感謝しても、しすぎることはありませんし、感謝して受け取る以外にはないはずです。

聖書が罪の贖いについて語る場合、そこには、罪というものが、だれかによつて、そのつぐないとしての代金を支払われなければ、決して赦されることがないのだという前提があります。それは、罪一般について言えることで、今日でも法律の基本概念の一つです。罪は、だれかによつてつぐなわれないかぎり、罪を犯した人に対して、つぐないを要求する力を持ち続け、それが果たされるか、さもなければ、罪を犯した本人が死ぬこと以外では、その力を失うことにはないのです。その罪のつぐないをするのは、当然、本人であるべきですが、本人はもはやそれをするのができなくなつてしまいました。それを、キリストが身代わりに支払つてくださったわけです。いのちにかかわる大きな犠牲が支払われることによつて、わたしたちの罪はつぐなわれ、わたしたちは、このキリストに免じて、赦されたのです。これが、キリストの贖いによる救いの消息です。ですから、この救いは、神のあわれみ以外の何ものでもなく、わたしたちは、この救いを用意し

てくださった神が、どんなに深くわたしたちひとりひとりを愛してくださったっているのかということがわかります。

ですから、このことがわかるとき、わたしたちはこのすばらしい神の恵みの救いを、心から感謝して受け取る以外にはありません。そして、神のしてくださったことのすばらしさに、ただ神をほめたたえるだけです。

注(1)「罪を犯した」(三・二三)と訳されたことばは、原語のギリシヤ語では、ヘーマルトン(ἥμαρτον)ということばが使われています。これはハマルタノー(ἁμαρτάνω)ということばの不定過去形です。

(2)「失って」(三・二三)と訳されたことばは、原語のギリシヤ語では、ヒュステルーンタイ(ὑστεροῦνται <ὑστερέω>)ということばが使われています。これは、「欠いている」とか「達しなくなっている」という意味です。

(3)イザヤ書四三章七節。

(4)創世記一章二七節。

(5)「賤い」(三・二四)と訳されたことばは、原語のギリシヤ語では、アポリュトロシス(ἀπολύτρωσις)ということばが使われています。

(6) ἄξιον

(7) コリント教会への第一の手紙、六章一九―二〇節 新改訳。

(8) 同書七章二三節。

(9) ガラテヤの諸教会への手紙三章二三節。

(10) 同書四章五節。

(11) 同書五章一節。

(12) 同書五章一三節。

(13) ペテロの第一の手紙、一章一八―一九節 新改訳。

(14) ヘブル人への手紙九章一―一二節。